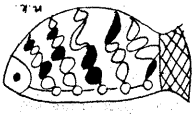
小学校の教育と幼稚園

座談会



文京区立駒本小学校　明間進子
私立井草幼稚園　飯島日出美
北野成子
司会　津守真

司会者　新しい学年がはじまるころになると、いつも小学校の教育と幼稚園の教育のことが問題になります。幼稚園の側では、子どもたちが小学校にいってからどんな様子だろうかと心配し、小学校の先生から苦情が出ると、幼稚園での教育はこれでよかったのかしらと反省します。そして子どもたちが小学校にゆく前には、小学校にゆくための特別の準備をした方がよいのだろうと心を砕くこともあるでしょう。もともと、幼稚園の教育と小学校の教育とがまったく違ったものであるはずはないので、もしも大きな違いがあるとするならば、どちらかがへんなのです。子どもが三月から四月になると、急に成長して違ったものになるなどということも考えられないことです。小学校は幼稚園を、幼稚園は小学校をもっと理解してゆかなければなりません。

今日は、小学校の中でもとくに進歩的な学習形態をとって教育を進めておられる駒本小学校の明間さんと、幼稚園の側から飯島さんに出席していただきました。また、北野さんは幼稚園に勤めておられたこともあり、小学校で教えられた経験もあります

ので、両方の側を理解してお話しいただけると思います。ではまず明間さんの学校の様子からお話をうかがいましょう。

明間　私の学校は、明るく楽しい学校、のびのびと、しかも意欲的に学習できる学校、ひとりの劣等児もいない学校ということを目標に、いわば児童中心に進んでおります。学校教育の出発点である低学年、とくに一年生の問題に重点をおき、スムースなスタートができるように考慮しています。今年は、幼稚園教育を受けてない新入児童を入学前に集めて、一週間ほど学校内に幼稚園をもうけ、子どもが学校や先生に対してもつ抵抗をなくし、学校は楽しい所だ、早く学校へ行きたいなという自覚を高めるように努めました。一方在校生の方は、児童会を中心に、三学期の後半『新入生を迎えよう』という単元で、各学年に応じたいろいろの活動を展開します。例えば、入学式に全校器楽合奏で歓迎しよう、新入生一人ひとりにおみやげを送ろう、教室を飾ってあげよう、などということで、子どもたち自身の手で入学歓迎の準備を進めます。

私の学校のもう一つの特徴は、学習時間を一時間ずつに細分しないで大きく分け、その時間の中で学習を綜合的に展開しようとしていることで、とくに低学年の場合は、生活の問題を中心に教科をあてはめていくようにしています。ある時間の中に、国語あり算数あり、社会あり音楽あり、といった具合です。

司会者　それでは、次に飯島さんの幼稚園の状況のお話しを願いましょうか。

飯島　私どもの幼稚園では、毎朝十時頃に全園児が集合して体操をしたり歌を唱ったりすることになっておりますので、明間さんの学校より、現在の一般の小学校教育の型に近いかもしれません。幼稚園では、登園と同時に園児の生活が始まるわけですから、始められたままごと遊びや積木遊びが、十時の集合で中断されることになります。また教師の方でも、一週間のテーマから、今日一日の目標をもっていても十時の集会を予想して、時間のかかることですと十時まではただ何となく遊んでいなければなりません。ですから、なるべく子どもたち一人ひとりの興味や能力に合せて指導するようにしていますけれど、どうしても一斉保育の型をとらなければならないときもあります。

その点、一日をひとつの流れとして学習していらっしゃる明間さんの学校は、理想的ですね。

司会者　一般の学校では、明間さんの学校のように子どもの活動に合せた時間割をつくっていないと思いますが、北野さんは小学校と幼稚園の両方の経験をされて、小学校と幼稚園の相異についてどのように感じられましたか。

北野　私が幼稚園と小学校の違いについてま

ず感じたのは、小学校では四十分授業をして十分は休み時間、というように学校生活が時間でこまかく分れていること、これと反対に幼稚園では、一日の流れがはっきりした時間では区切られていないということでした。一般に小学校のやりかたはこんなふうだと思いますが、珍しい明間さんの学校では、やってみていかがですか。

明間　私は、とくに低学年の場合現在のゆきかたでよいと思います。高学年になりますと学習の範囲もひろがり、生活即学習でない場合も多いし、複雑になってきますので一概に言えませんが、時間をこま切れにしないで学習の発展、児童の意欲などで一日の計画をたてるのはよいと思います。それに私の方では、いわゆる半永久的な時間割というものがありません。年間、月間のプランをもとに子どもとの話し合いで、週間、一日の学習計画をたてます。一日の時間のとりかたは、始業時より十時までを一区切りとし、主として基礎的な学習（国語、算数）をおこない、十時二十分より給食前までを一区切りとし、主に問題解決的な学習（社会、理科）をおこない、午後は主に表現的学習（図工、音楽）をおこなうようにしております。十時からの二十分間の休み時間は、子どもと共に過し、職員室へは帰りません。子どもが学校にいる間は、子どもと共にありたいと思います。

北野　朝八時から夕方五、六時までお休みがなければ、ずいぶん疲れるし、たいへんですね。幼稚園ではふつうお休み時間というようなものがないわけですが、実際のところ私などは、幼稚園で二時頃子どもを帰すとほっとしました。

明間さんの学校のような方式で、やれるかどうかは、一学級の人数にも関係してくると思いますが、その点はいかがですか。

明間　学級の人数は、五十名から五十六名ほどです。現在の小学校としてはふつうだと思いますが、協同製作、自主活動、綜合学習などを展開するには多すぎるような気がしますし、個人指導もじゅうぶんにいかない場合もあります。

北野　私の幼稚園でも、一組五十人ぐらいおりました。あまり広くない場所で、設備や材料も不足がちで五十人の子どもを保育すると、どうしても一斉保育になりがちです。自由保育をしようと思っても、どうもあいまいになってしまいます。

司会者　そうですね。一組の人数、教室の広さなどが指導形態に大きく影響しますね。四十人をこえると個人をみることがどうしても困難になる。それで便宜的な方法を考えるということになります。

飯島　明間さんの学校のやりかたで、高学年になってから学力の点で問題が出てきませんか。

明間　低学年から徐々に積み上げられてきた学校ですので、問題は多く含んでいると思

いまして研究しつつ進んでおります。高学年は低学年とまったく同じ方法でいいということは決して言えないことですから。しかし、学力の点では心配しておりません。私の経験から、学力というものはつめこみ主義からは生れないと思います。自発的に、意欲的に、そして楽しく学習でき、児童の一人ひとりが自分の力をじゅうぶん発揮できるような環境が整ったとき生れるのだと思います。

北野　それで楽しく自発的に学習できたら、すばらしいと思います。どうしても現在一般にされているやりかたでは、幼稚園と小学校というようにはっきり区別がつけられています。

飯島　よく、幼稚園からきた子どもは自分勝手であるとか、お行儀が悪いとか言われますね。それが幼稚園の父兄に反映して、幼稚園ではあまりに自由すぎる、もっと厳しく躾けてほしい、などと言われることがよくあります。幼稚園で一年なり二年なり団体生活をしていれば、並ぶことにも教室に入ることにも慣れているでしょうし、「先生」にも親しみを感じているでしょうからわがままもでるのだと思いますけれど、その点いかがでしょうか。

北野　幼稚園の卒業生を小学校へ送ってまず心配なのは、一時間中静かにすわっていられたかしら、先生の言われることが理解できるかしら、などということです。このようなことで「あそこの幼稚園からきた子どもはやりやすい」などと、幼稚園の価値がきめられてしまうような気がします。

　実際に今の小学校のやりかたでは、先生が児童を引っぱっていくという空気が強いので、静かでものわかりのよい子どもがやりやすいということになります。しかし、子どもの生活中心主義であれば、このような子どもを必ずしも要求しないようになるでしょう。

　それから、当りまえのことではありますが、幼稚園では年令が低いために保育というように保護の面もあると思います。けれども小学校では、義務教育の間に何を知らなければならないかという問題がでてきます。こんなことからも、幼稚園と小学校の段階がつきやすくなってくるのでしょう。教師も、何が大切かということをよく理解していなければならないわけです。

飯島　私立幼稚園では、すぐに経営にひびくので、小学校からの要求には敏感です。だから小学校の先生は、幼稚園の教育をよく知って、高い要求を出さないでほしいと思います。

明間　私は幼稚園の先生がたに敬意をはらっています。個人個人に対して本当に理解をもち、懇切丁寧な指導をしておられる点では、一般の小学校の先生はある点ではみならわなくてはと思います。子どもの微妙な心理をよく把える観察や指導にいつも感心

します。

幼稚園からきた子どもは、わがままだとか社会性がありすぎるとか言われますが、一口で言えば自由でいいなと思います。幼稚園にいかなかった子どもにないところをもっています。

私は、先生というものは、子どもの理解者であり協力者でなければならないと思います。なぜならば、子どもの心の中にこの先生はぼくのことをよくわかってくれる、よく相談してくれるという意識が生まれてきたとき、また先生が子どもは子どもなりの人格を認めて話し合ったり、意見を聞いたりできるような気持になったとき、つまり心と心がふれ合い、むすびついたとき、はじめて指導し、指導される場ができると思うからです。その場ができなくて、なんの指導ができるかと思います。先生は、知識万能者である必要はないと思います。ただ先生自身が常に問題をもち、問題をどのように解決すべきか、問題をどう発展すべきかを考えていて、それを子どもたちにどのように与えたらよいかという具体的な方法の研究も常にしていなければならないと思います。こんなことを言いましたが現実には、私自身もそうなのですが、なかなかできないのを悩むわけです。

そういう先生の個人の弱さをおぎない、強さを更にのばすような意味も含めて、私の方では一学年の何人かの先生がたが連絡を密にし協力し合って学習に当っております。低中学年では一年ごとに学年はもち上りながら担当する学級を変えていくような方法をとっています。子どもたち自身にも私の先生は誰の先生ということでなく学年の先生がた、学校の先生がたはみな自分の先生であるというようにしています。

一学級一教師であるとともに一児童全教師でありたいと思います。学校全体が一つの有機体であって、先生がた同志も、先生と児童も、また児童同志も常に調和されていなければと思います。

北野　私は教科ごとに先生が入れ替ることを経験しましたが、とくに低学年の場合は、教科間のつながりがどうしてもとりにくいので、やりにくいと思いました。もちろんその教科について得意な先生ですので、指導方法は上手ですが、一日の子どもの流れを知るのにも、やはり幼稚園や小学校低学年の先生は一組一人で一日中の生活を指導することを原則とした方がよいようです。

司会者　今のお話を伺っていると、幼稚園の教育と小学校の教育とは矛盾しないでゆける道があるように思いますね。

幼稚園と小学校のことについては、もっといろいろの見方もありますし、今日は論じられなかった問題がいろいろありますが、またの機会にゆずることにして、今日はこのへんで打切りたいと思います。有難うございました。